被災地岩手県での子どもワークショップ報告

西澤真樹子

博物館で活動する標本作製サークル「なにわホネホネ団（以下ホネホネ団）」は、NPO法人大阪自然史センター、大阪市立自然史博物館と共に、2011年9月、11月に岩手県の沿岸部で子どもワークショップ「きょうは1日、化石であそぼ！」を開きました。開催のいきさつと、当日の様子を報告します。

博物館を応援したい

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、三陸地方沿岸部に大きな被害をもたらしました。陸前高田市をはじめとして多くの博物館も被害を受け、いま、全国の博物館が標本の救出にむけて活動しています。震災の直後、私たちホネホネ団の中でも支援活動について議論し、博物館で活動するサークルとして、被災した博物館とその利用者である子どもたちを応援したいという声があがりました。ただ、西日本にいる私たちには現地の様子も何を望まれているもわかりません。カンパや義援金集めと並行して、もとからつながりのあった岩手県の子育て支援サークル「あそびma・senka」さんに連絡を取り、何かお手伝いできないか相談したところ『親子のサポートをしてあげたいがまったく余裕がない』『お金の支援はあってもマンパワーが不足していて使えない』といった声を聞くことができました。

そこでホネホネ団員とNPO 法人大阪自然史センターの子どもワークショップスタッフとで遠征団を結成し、ふだん博物館で行っているプログラムを岩手版にアレンジした体験型ワークショップを現地で開催することになりました。9月の第1回は遠野市の二つの児童館（遠野市には沿岸部の子どもたちも移住しています）、下閉伊郡山田町、大船渡市の市立博物館の4カ所、11月の第2回は陸前高田市の竹駒コミュニティセンター、大槌町の中央公民館の2カ所が会場になりました（**図3**）。

図1：岩手博物学界の偉人・鳥羽源藏氏。西澤真樹子画。

ワークショップの2つのテーマ

このワークショップでは2つのテーマを設けました。①岩手の古生物をテーマにした工作、②三陸出身の博物学界の偉人・鳥羽源藏氏（**図1**）が1930年頃岩手県気仙郡で記録した、貝殻を使った子どもの遊び（Nature Study2011年11月号で紹介されています）の再現コーナーです。岩手県は、古生代から新生代に至るまでのあらゆる地質時代の地層が分布し、日本最古のアンモナイトや日本初の恐竜化石であるモシリュウ、今年久慈で発見された翼竜など、

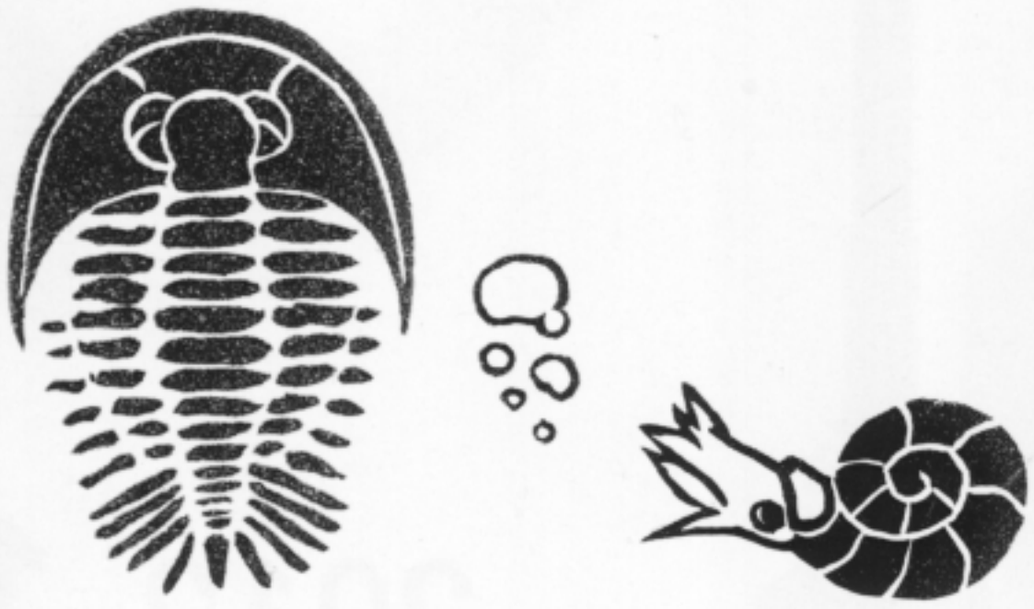

図2：三葉虫（左）とアンモナイト（右）のはんこ。

図3：遠征団の足跡。

図4：会場づくりを手伝う。山田町。谷 陽子氏撮影。

さまざまな種類の化石が豊かに産出することで有名です。また、明治から戦前に活躍し、宮沢賢治とも交流があった鳥羽源藏氏（現陸前高田市小友町出身）は岩手の博物界の太陽と呼ばれ、その存在はひろく知られています。岩手県が誇るこのような地域の財産に触れ、子どもたちに郷土への愛着や誇りを感じてほしい。そしてそれは、地域の自然の記憶を保管する施設である「博物館」の再開に向けた支援にもつながるのではと考えたのです。

大忙しの準備作業

このように夢を大きく語ってしまったものの、実際の準備は大変でした。40万円の助成金では資金が足らず、バザーやカンパを呼びかけて集めました（友の会会員のみなさん、博物館のスタッフのみなさんからも、たくさんのカンパを頂きました）。また、人数制限をせずなるべく多くの子どもたちに楽しんでもらおうと、用意した材料は350名分。ホネホネ団のメンバーが何度も集まり、アンモナイトの石膏型を何百個も作っては磨き、絵の具パレットに

図6：にぎわう会場。大船渡市立博物館。谷 陽子氏撮影。

図5：開始を待つ行列。大船渡市立博物館。勝本浩之氏撮影。

するための牛乳パックを集めて裁断し、はりえの色紙を仕分け、見本を用意。岩手の古生物の消しゴムはんこを彫り、子どもたちに配る絵本を約400冊も集め、メッセージカード入りの小さなお土産パックも作りました。自然史センターのワークショップスタッフは、岩手の古生物貼り絵の台紙を描き下ろし、会場に掲示するたくさんの楽しい掲示物やポスターを制作しました。こうして準備した荷物は300kgを超えていました。

どの会場でも大盛況

そして当日、アンモナイトや恐竜の旗で色とりどりに飾り付けられた会場には子どもたちが次々にやってきました（**図5**、**図6**）。用意されたプログラムは、無地のバッグに化石の消しゴムはんこを押して作る「ぺたぺた化石バッグ」、切手つきハガキにお便りを書いて恐竜ポストに入れると、後日大阪から投函されて再びハガキがやってくる「空飛ぶ？！化石絵はがき」、モシリュウ、翼竜、アンモナイトのどれか1枚を選んで色紙を貼付け完成させる「はりはり化石はりえ（第2回ではカレンダーに加工）」、白いレプリカに彩色して作る「アンモナイト化石ストラップ」、そして「岩手の昔の貝遊び」の巨大な恐竜ぬいぐるみと写真が撮れる「きねんさつえいコーナー」、好きな絵本を選んで持ち帰る「本・えほんコーナー」の7つ（**図7**、**図8**）。保護者やもっと小さな子どもたちのための「ママのリラックスコーナー」などもありました（遠野市の児童館では時間が限られていたため、化石はりえだけを行いました）。

遠野市では部屋に入った子どもが「博物館みたい！」と声を上げ、大船渡市では会場になった市立博物館の職員さんからは「震災後こんなにたくさんの子どもを見たことがなかった」、山田町での参加者から

図7：貝遊びを楽しむ。

は「子どもとチラシを見ながら、あと何日かなって楽しみにしていたんです」「何かをもらうのではなくて、こんなイベントに並ぶのは震災後はじめて」と喜ばれました。子ども向けの支援イベントには、キャンプに招待したり、週末にバスで遠足に出かけたりといった、離れた場所で「選ばれた子ども」だけを楽しませるものが多いようですが、今回のように地元で開催したことで、誰でも気軽に会場を訪れ、その空間を楽しむことができました。ひとりで来られた年配の方から、「子どもの笑顔はうれしい」という感想もいただきました。

こうして、第1回目は遠野市130人、山田町280人、大船渡市立博物館320名。第2回目は陸前高田市187人、大槌町123名と、参加者は全部で1040人にもなりました。

これからの活動に向けて

「とにかく何かしたい」と試行錯誤の中で行った2回の子どもワークショップ。遠征団のメンバーには大阪市立自然史博物館だけでなく、高槻市の芥川緑地資料館あくあぴあ芥川、滋賀県立琵琶湖博物館などからもメンバーが加わっています。そしていま、遠征団には宮城県気仙沼市で活動する市民団体からワークショップ開催のオファーをいただいており、ある博物館からは次年度普及行事への協力も相談されています。

遠征団では、これからも被災した博物館の再開に向け、「標本レスキュー」に続く支援の可能性を探していきたいと考えています。資金はゼロからのスタートですが、今回生まれた人間関係を軸に、楽しいワークショップを手に三陸の沿岸全部を巡りたいと夢が膨らんでいます。これからもご支援よろしくお願いいたします。

図8：はりえを楽しむ。

謝辞

今回のワークショップでは、子育て支援サークル「あそびma・senka」のみなさん、山田町教育委員会のみなさん、大船渡市立博物館のみなさん、大槌町で子どもの支援を続ける「NPO法人パレスチナ子どものキャンペーン」のみなさんに大変お世話になりました。はじめてのイベントが成功したのは、現地の状況を把握し、開催に関して的確な助言をいただいたおかげです。大阪府職員の勝本浩之さん・笠島秀夫さん、大阪市立自然史博物館メーリングリストomnhを見て参加していただいた仙台市の深瀬徹さん、大船渡市立博物館の工藤やよいさん、岩手県立博物館学芸員の鈴木まほろさん、陸前高田市市立博物館の熊谷賢さんには当時の運営スタッフにも加わっていただき、一日中子どもたちの相手をしていただきました。特に鳥羽源藏氏の出身地陸前高田市で、源藏先生の標本を引き継ぐ学芸員の熊谷さんに参加いただけたことは意義深く、遠征団全員にとってたいへん嬉しいことでした。お礼申し上げます。

このプロジェクトは、花王コミュニティミュージアム・プログラム2011「心に寄り添う文化プロジェクト24」の助成を受けて行われました。

＜**にしざわ　まきこ**：本会評議員、なにわホネホネ団団長＞

図9：プテラノドンのはんこ。